



TITLE:

超帝国主義論の批判と問題点

AUTHOR(S):

静田, 均

CITATION:

静田, 均. 超帝国主義論の批判と問題点. 経済論叢 1960, 85(5): 299-321

ISSUE DATE:

1960-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/132754>

RIGHT:

經濟論叢

第八十五卷 第五號

超帝國主義論の批判と問題点…………… 靜 田 均 1

國家獨占資本主義と「自由化」問題… 松 井 清 24

オーベル・シュレージェン

製鉄業の創出過程…………… 大 野 英 二 40

ソースタイン・ヴェブレン

の資本主義論に関する一研究(一)… 中 山 大 66

昭和三十五年五月

京都大學經濟學會

超帝國主義論の批判と問題点

静 田 均

一

わたくしは別稿において、第一次大戦中にカウツキーが發表した三つの論文をとりあげ、その中にあらわれた超帝國主義論の要点を再録した（『カウツキーの超帝國主義論』經濟論叢 第八五卷 第二号、昭和三年二月）。ところで『最高の段階としての帝國主義』の中には、この超帝國主義論にかんする重要な批判が含まれている。すなわち同書の第七章から最後の第一〇章にいたる諸章がそれであるが、この部分は皮肉と嘲笑をまじえた假借なき反駁の連鎖だといつてよい。つぎつぎと加える追撃の砲火は、敵に立ちなせる余裕を与えず、戦いは完全な一方的勝利に終わったかのように印象づけるほど迫力のこもった場面に、われわれはでくわす。とくにカウツキーの側からは、第一次大戦後においてすら、直接これぞといった抗弁がなされなかっただけ、一層その感を深めることは否めない。しかし今日あらためて既往を回顧し、現代の問題との関連において、もういちど冷静な省察を企てるとしたら、なおいくつかの問題点に逢着することは、おそらく避けがたいであらう。もちろん、それはカウツキーの超帝國主義論の当否そのものとは別の問題であるのだが……。

二

レーニンが帝國主義にかんするカウツキーの概念規定に分析を加え、その反駁を試みたのち（拙稿「カウツキー帝國主義論の原型」経済論叢 第七五卷 第三号、昭和三〇年三月）、進んで超帝國主義論に批判の焦点を集中して、『純經濟的見地という言葉をも「純粹の」抽象と解するならば、超帝國主義の理論において語られうることのすべては、發展は独占の——それゆえ一箇の世界的独占、一箇の世界的トラストの——方向に動くという命題に帰着する。この命題は疑いもなく正しいが、しかし同様に無意味である』と（第七章）。

抽象論としては正しいが、しかしナンセンスだというのは、いったいどんなことを意味するのであるうか。それはあまりにも具体性をかいた觀念論であつて、現実ばなれがしきることにつきてであらう。死せる抽象の代りに、生ける現実を直視せよ。カウツキーがいかに空論を弄するか、たちどころに判明するにちがいない。そういうのが、レーニンの根本の考へであるとおもう。

彼はカルバーをかりて世界經濟の現状を分析し、そこに經濟および政治的条件の驚くべき多様性、種々の國の發展テンポの甚だしい不均等、帝國主義諸國のあいだにおける狂暴な闘争を指摘した。また全世界を數地域に分け、鐵道が最近二〇年間にどのようなテンポで敷設され、どのような分布図を示したかを明かにしている。それから引き出された結論は、一言でいえば、資本主義の發展の不均等ということにはかならず、發展の不均等が自己を貫徹するかぎり、國際間の政治と經濟の均衡は、たかだか一時的な状態にすぎず、永續性をもちうるはずはない。『金融資本とトラストは、世界經濟の種々の部分の發達速度の相違を減少するどころか、かえつてそれを増加する。と

ころがひとたび勢力関係が變つてくれば、資本主義のもとでは、この矛盾は強力によつてのほか、いつたひとうして解決されるであらうか』(同上)。

もちろん現実の世界においても、カウツキーの示唆する超帝國主義の萌芽らしいものが絶無だというのではない。たとえば國際カルテルのごとき、あるいは國際的協調融資のごときものの存在することは、レーニンもこれを認めるにやぶさかではない。しかし、その評価はまったく異なる。それは國際間の対立や競争を恒久的に解消するわけではなくて、一時的に緩和するだけだと見るのである。『資本主義の基礎の上では、戦争いがいに、一方では生産力の發展および資本蓄積と他方では植民地の分割および金融資本の「勢力範圍」とのあいだの不調和を解決するためのどんな方法がありうるか』(同上)。帝國主義の將來について二つの可能性が考えられるというカウツキーの提言にたいして、レーニンは、帝國主義が不可避免的に戦争につながることを強調してやまない。矛盾の弁証法的發展の確認、カウツキーとの決定的相違——われわれは、革命家にふさわしい直観の鋭さと同時に自己主張の強さをそこに見出す。

いづれにせよ、両者の対立は、ひつきよう帝國主義の本質把握にかんする相違に由来するものと考えざるをえない。レーニンにあつては、帝國主義と独占資本主義とは不可分の關係にある。というより一箇同一の存在にほかならぬ。それは政治体制・經濟体制そのものである。しかも帝國主義は戦争に導き、戦争は革命につながる。超帝國主義——継続的平和というコースは現実にはありえない。これに反して、カウツキーによれば、帝國主義は高度工業資本主義の段階にある大國の政策である。否、政策の一つにすぎない。政策はいろいろの要因によつて決定される。情勢の變化が、政策の轉換をもたらすことは、十分に考えられるところである。こうしたカウツキーの考えをより

明確ならしめるため、われわれは第三論文からさらに若干の引用を追加しよう。

『たしかに現在の戦争は、帝國主義を会得しないでは理解できない。帝國主義は資本主義国家の政策の最もいちじるしい最も強力な推進力をなしている。とはいえ、それらの唯一の推進力ではない。たとえ帝國主義が資本主義の発展から必然性をもって生じるにせよ、それはもちろん資本主義国家の発展のために欠くべからざるものではない。帝國主義のうちに貫かれているものは一つの努力——それは帝國主義だけを特徴づけるのではないが——超過利潤を追求する努力である。この努力はもちろん資本主義と密接に結びついている。それは資本主義とともにのみ消滅しうるものであり、社会主義によってのみ克服されうる。しかし帝國主義は、超過利潤を獲得するための手段の一つではあるが、唯一の手段ではない。この道が閉ざされれば、資本は他の道を求める』(Kautsky, Der imperialistische Krieg, Neue Zeit, 35. Jahrg. I Bd. 1917 S. 475 波多野真編『帝國主義論』創元文庫 昭和二八年 九三ページ)。『帝國主義政策は、それがなくては資本主義の枠の中で、もはや生産がうまく営まれないという意味で必然的なものではなく、むしろ資本主義をますます力強く発展させているある種の資本家層の利潤追求活動から生ずるものであり、一国が帝國主義政策を行うかどうかは、国内政治の勢力問題であって、帝國主義が利潤をもたらす階層や帝國主義に抵抗する階層が、その国でどれほど強いかにかかっている。……帝國主義はその全存在からすれば、国内政治の力問題であるばかりでなく、明かに対外政治の力の問題である。帝國主義の政策はまさに力の政策であって、それ以外の何ものでもない』(N. Z. S. 482 前掲邦訳書 一〇六ページ以下)。

要するにカウツキーにとっては、帝國主義は国際的な権力政治の問題である。それは強大国の問題であって、弱小国の問題ではない。これを裏返しにしていえば、資本主義の発展段階だけでは割りきれぬところに問題の複雑さ

がある。帝國主義が國際政治の問題である以上、一面においてはブルジョアの理性の狡智により、他面においては反帝國主義勢力たるプロレタリアの成長によつて、変改をうけうる可能性は十分に考えられてよい。帝國主義の超帝國主義への昇華の可能性とそれへの対策を研究することは、迂遠でもなければ、無意味でもない。そういうのが、カウツキーの主張の骨子であるとおもわれる。この意味で、カウツキーの超帝國主義論は、一つのヴィジョンだといふことができる。顧みて他をいうディレッタントの懷疑主義として、一種のもどかしさを感じるひとが、よしあるとしても……。

三

『資本主義の最高の段階としての帝國主義』の第八章は、『資本主義の寄生性と腐朽化』と題されているが、この章は同書の中でもとりわけ注目にあたいする章である、——それは二重の意味において。問題は帝國主義に固有の寄生性にかんするのだが、この一面はこれまで大多数の論者によつて、然りマルクス主義者によつてさえ、ややもすれば等閑に付されがちであつた。レーニンはそれをあらためて強調し、世の注意を喚起しようとして試みている。第二、のみならず、彼はこれを拠点としてカウツキーにたいする果敢なる闘争を挑んでいる。否、徹底的な排撃を試みているといつてよい。

さて前述のとおり第八章は『資本主義の寄生性と腐朽化』という表題になっているけれども、内容は資本主義一般の寄生性および腐朽化を取扱つたものではない。そこではもっぱら独占資本主義＝金融資本主義＝近代的帝國主義の寄生性および腐朽化が問題とされている。この意味からすれば、第八章の表題はむしろ『帝國主義の寄生性と

腐朽化』とすべきであつたらう。

それはともかくとして、帝國主義の寄生性とか腐朽化とかいふのは、いったい何を指すのであろうか。またそれらの現象は何に原因を負うのであろうか。これにたいするレーニンの見解は、つぎの三点にしぼることができる。

第一、資本主義的独占は技術的進歩を阻止する傾向をはらむという主張。『この独占は、他のすべての独占と同様に、不可避免的に停滯と腐朽化への傾向を生みだす。たとえ一時的にもせよ、独占価格が設定されるかぎり、それに応じてある程度まで、技術的進歩にたいする——したがっていっさいの他の進歩、前進運動にたいする——刺激的原因が消滅し、さらにまた技術的進歩を人為的に阻止する経済的可能性が現われる』（第八章）。その実例として、レーニンは、ドイツのガラス瓶製造業者の組織したカルテルが、アメリカのオーウェンズの特許権を買いつたまましまひこんで、その利用を妨げたという事実を指摘している。事例はただ一つしか挙げられていないけれども、これ以外にも類似の事例はさだめしあつたこととおもわれる。今日のわれわれはより新しく、もっと生きのよいいくつかの実例を追加するに苦しまぬであろう。私的独占が技術の進歩を阻害する一面を有することは、たしかに否定するわけにいかない。それは厳然たる事実だ。しかし問題の重心は、むしろどの程度のもんとしてそれを捉えるかという点にかかつている。

一九世紀の七、八〇年代からこのかた、ドイツやアメリカにおける私的独占の確立と跳梁は、明かにエポックを画し、いわゆる独占資本主義の到来を告知したが、あたかもそれと時を同じうして、新しい発見や発明が踵を接してあらわれたことは、著名な事実である。新しい工業エネルギーとしての電力および石油の登場、重油やガソリンを利用する内燃機関の完成、製鋼業におけるベッセマー法、トーマス法、シーメンス・マルタン法の案出、合成化

学工業の躍進、等々。それに伴って産業の重心は軽工業から重工業に移動した。ある者はこれを新しい産業革命と呼び、ある者はこれを第二の産業革命と特徴づけるほど、広範にして深刻な影響はいたるところに波及した（鈴木成高『産業革命』昭和五年 一六七ページ以下、星野芳郎「技術革新の根本問題」昭和三年 三二、一六〇、二二〇ページ）。

こうした技術の革新は、前代にくらべて、いかなる特色をそなえていたであろうか。第一、これまでのような経験や勘から割り出す素人上りの発明家ではなく、科学に根ざし、確乎たる理論に足をふまえた知識人の発明が、新しい脚光を浴びるようになった。エジソンやジーマンスは、それを証拠だてるほんの二、三の例にすぎない。彼らのある者は、技術者であると同時に、企業家、経営者となった。第二、新しい技術の完成は、最初から独占の大企業を生んだ。電機工業にしても、化学工業にしても、新興の花形産業は、巨額の資本を投下して、大規模な経営をおこなうのではなければ、採算がとれぬ性格のものであった。だから企業は、出発点においてすでに巨大独占体たるべき運命になっていった。第三、これらの独占的大企業は、技術の改善のため、進んで大規模の研究所を設置し、多数の専門技術者を雇用して、絶えず新しい製品の創造に没頭せしめた。新しい製品の大量生産によってあげえた莫大な利潤を再投下して、つぎの新しい製品の発明に乗りだすなど、巧みな飛び石戦術を利用して、産業の開発につとめ、成功をおさめた事例は少くない（J. D. Barnet, *Science in history*, 1954 p. 389. 鎮目恭夫・長野敏訳「歴史における科学」第二分冊 昭和三〇年 三二八ページ以下）。かくて独占は新しい技術を創造し、経済の発展をうながす原動力であるという見解がおこなわれるかと思うと、他方では、技術の躍進は独占の形成をもたらす楯杆であるという見解が、提唱されることもあった。

レーニンが当時の技術革新にどれだけの洞察をもっていたか、わたしにはよく判らないけれども、独占が生産力

の發展を長期にわたつて全面的に阻止すると考えていなかったことは、たしかのようにおもわれる。さきの引用句につづいて、『もちろん独占は、資本主義のもとでは競争を世界市場から完全に、また非常に長期にわたつて排除しうるものではない』と書き、また『超帝國主義論のナンセンスなことの理由の一つは、とりわけこの点にある』とも書いている。このかぎりにおいて、彼は資本主義のダイナミックな性格を看過するようなことはなかったといえよう。『もちろん技術的改善の導入によつて生産費を引下げ、利潤を高める可能性は、変化のために有利に作用する』という一句は、彼のいわゆる資本主義發展の不均衡の法則を根拠づける一支柱をなすと見ることができる。問題なのはむしろつぎの一句である。いわく、『だが他方では、独占に固有な停滯と腐朽化への傾向もまた作用を續けて、個々の産業部門や個々の国では、ある一定の期間、勝ちを制することがある』と（第八章）。これはいったい何を意味するか。独占は技術の進歩を妨げる一面を有すること、しかしそれは資本主義の全局にかんするものではなくて、いわば一部の現象であり、經過的な現象であるということではないか。換言すれば、相対的な意義しかもたぬということではないか。もしもそうだとすると、寄生性と腐朽化をもたらず要因としての技術の停滯は、さほど重要視するにはあたらないという結論に到達しないであらうか。

四

さて寄生性と腐朽化をもたらず第二の要因は、植民地の搾取ということである。レーニンはいう、『とくに広いゆたかな、あるいは地の利をえた植民地の独占的領有も、同じような作用をする』と（第八章）。自明の理だといふのであろう。これ以上たचितた説明は、何も与えられていない。

おもうに植民地の意義ないし役割は、資本主義の発展段階に対応して変化するであろう。競争資本主義時代においては、植民地は本国の工業製品の販売市場として主たる意義をもつが、独占資本主義時代においては、本国における過剰貯蓄の投資領域として次第に重要性を加える。しかもこの変化は、本国における産業構造の変化と対応関係にたつ。すなわち競争資本主義の段階においては、繊維・雜貨などの輕工業が主役を演ずるに反し、独占資本主義の段階においては、金屬・機械・化学工業などの重工業・大化学工業の比重がまし、産業構造は高度化する。資本財の輸出は、こうした産業構造の変化とともにますます重要性を加える。

ところで当面の問題は、競争資本主義の段階における植民地ではなくて、まさに独占資本主義の段階における植民地である。レーニンが第七章で植民地の意義を究明した際、商品輸出の角度からではなく、もっぱら資本輸出の視点から取扱つたことは、われわれのすで見たとこであるが（拙稿『帝國主義論にかんする覚え書』京大経済学部創立四十周年記念『経済学論集』昭和三四年 四四五ページ）、それは暗黙のうちに前述の相違を念頭においたからではなからうか。ともあれ、植民地が本国の過剰資本を吸収するかぎりにおいて、過剰貯蓄と過少投資の矛盾は緩和され、とも考えられるし、また植民地における超過利潤の収奪が、本国に帰還して、利潤率低落の傾向に阻止的作用をおぼす可能性も考えられよう。そうしてもしこれらの想定が承認されるとすれば、たとえ一時的な息抜きにすぎないにせよ、資本主義体制の補強ないし延命の効果をもつことをも承認しなければならぬであらう。この意味において、植民地の意義を單純に寄生性と腐朽化にのみ結びつけることは、やや一面的に失するといわざるをえない。

五

最後に寄生性と腐朽化の第三の要因として、金利生活者層の形成が指摘される。株式会社制度が開花期を迎えるとともに、擬制資本ないし証券資本と実体資本ないし機能資本とは、明かに分離する。株式・社債などの有価証券の所有者は配当所得や利子所得によって生活することができ、もはや企業経営そのものから完全に遊離する。そうした徒輩は単なる金利生活者であって、寄生虫的存在にすぎない。レーニンのいおうとすることは、ほぼ以上のごときものとおもわれるが、問題は果してそれだけにつきるであろうか。

いうまでもなく、株主は二重の権利をもつ。一つは利益配当に参与する権利であり、他は株主総会に出席して議決に参与する権利である。後者に無関心なものは、単なる利益配当に満足するにとどまる。配当の多寡のみが問題であって、経営に容喙することはない。そのかぎりでは、彼は金利生活者であるといえよう。この種の株主は無数に存在する。委任投票制や無議決権の出現は、右の事実を証明するものにはかならぬ。しかし、より重要なのは、むしろ議決権の行使をめざす株主である。株式所有を通してAの会社がBの会社を支配するとか、企業と企業とがたがいに株式を持合うとかいう事例は、今日きわめて多いが、こうした経営への参与をめざす株主こそ、実は注目すべき存在だといわねばならぬ。この種の株主は単なる金利生活者ではない。

株式の配当は利潤の一部であり、実質的には利子にひとしい。資本主義が発展すればするほど、利子率はますます低落の傾向をたどるのが大勢である。そのかぎりでは、金利生活者の安楽死を期待してよいかもしれない。が、ここで議論は二つに分かれる。第一、株式であれ、社債であれ、証券の所有がもたらす所得がいかに莫大なものであ

つても、その大部分は消費にあてられるわけではなく、むしろ貯蓄され、やがて投資に向けられる。だが、貯蓄と投資とのあいだにはずれがある。その結果、過剰貯蓄と過少投資が共存するものとすれば、拡大再生産または経済成長は阻害されるであろう。資本主義は停滞に陥るか、あるいは停滞をさげんがために、国外に資本輸出を強行する必要に迫られる、等々。これはいちおう筋の通った見解といえよう。第二、金利生活者が利潤の大部分を収奪して、それを享樂に消費すれば、貯蓄は阻害され、拡大再生産は困難となり、経済成長は停滞するであろう。生産力は限界に近づき、より以上の発展は望みがたい。資本主義は動脈硬化的症狀を呈する、等々。しかしこの種の論法は、ある意味でホブソンの寄生的帝国主義論の焼きなおしであり、安易なる流用にはかならぬ。以上、二つの論理的コースのうち、レーニンはいずれに重点をおいて自説を展開しようとするのであろうか。正直のところ、わたしには、的確な判断がつかかねる。ただ寄生性と腐朽化を強調するあまり、不労所得の素朴なる弾劾論におちいらぬよう警戒を加える必要があると信ずるのみ。

他の半面において、つぎのようなことが考えられぬであらうか。証券の数量がますます増大するにつれ、ますます広範囲にわたって分散し、一般大衆にも普及するとしよう。その結果、中小企業者層やいわゆる勤労階級にまで第二所得の源泉が開放されることとなる。そしてこのような事態は、彼等をば変革を歓迎するよりも、現状肯定ないし現体制擁護につなぎとめるか、そうでないまでも、せいぜい微温的な、あるいは漸進的な改良主義に走らしめる傾向を馴致する、等々。しかしレーニンは、そんな問題に余分の神経を浪費する必要を感じなかったもののごとく、生産過程から足を洗ってひたすら利札切りに没頭する人々だけを意識の対象としたかのように見える。

それはさておき、金利生活者層の形成は国内きりの問題ではなく、実に国際的にも重大な意義をもつ。レーニン

はホブソンにしたがって、先進資本主義国の对外投资から吸いあげる利潤や利子が、貿易によってもたらす利潤所得をはるかに凌駕することに注意を促すばかりでなく、進んで金利生活国の成立を結論づけるのである。いわく、『帝国主義の最も本質的な経済的基礎の一つである資本輸出は、金利生活者層のかかる完全な生産逃避をさらに甚だしくし、かつ二、三の海外の国および植民地の労働の搾取によって生活する国ぜんたいに寄生国の烙印を押す』と(第八章)。彼はシュルツェ・ゲーバーニッツ、ワルタウスハウゼン、シルダーなど一連の非マルクスの学者を動員して、いかに先進資本主義諸国が金利生活国の運命をたどりつつあるかを、鮮かに描いてみせる。しかし、とりわけ印象的なのは、ホブソンにたいする彼れの異常な関心である。だから、われわれはいやでもホブソンに一瞥を投じないわけにはいかない。

レーニンが巧みに要約したとおり、ホブソンは古代帝国主義の典型である大ローマ帝国の白壊作用を二つの原因に帰した。経済的寄生性と従属民族をもつてする軍隊の編成が、すなわちそれだ。ホブソンは書いている、『第一のものは経済的寄生の習慣であり、これによって支配国家は自国の支配階級を富ませ、また自国の下層階級を買収しておとなしくさせておくために、その属領・植民地・従属国を利用した』と(J. A. Hobson, *Imperialism*, 3rd Ed. 1938 p. 194 矢内原忠雄訳『帝国主義論』下巻 岩波文庫 昭和二七年 一〇二ページ)。第二の原因に関連して彼はいう、『帝国主義の盲目性を語る最も奇妙な徴候の一つは、イギリス・フランス・その他の帝国主義諸国が、この危険な依存の道に足をふみいれている、あの向うみずの無頓着さである』と(I. c. p. 316 前掲邦訳書 三五ページ)。簡単にいえば、植民地支配のための軍隊をば土民兵で編成しているということである。

要するにホブソンがいおうとしているのは、近代の帝国主義諸国が古代帝国主義国といかに類似しているかとい

うことであり、前轍をふんで没落の過程をたどる公算があるということにはかならぬのだが、彼はさらに一步を進め、中国やアフリカの分割が西欧諸国におよぼす影響について、つぎのような見通しをたてたのであった。いわく、『「分割が完了した」そのあかつきには、西ヨーロッパの大部分は、今日すでに南部イングランド地方やリヴィエラ地方や、さらにイタリアやスイスの観光地帯または邸宅地が呈しているのと同じ外観と性格とをおびるようになるかもしれない。つまり、そこには、極東から配当金や年金をうけとる富裕な貴族の一小群のほか、それよりいくらか大きなおおかえ自由職業者と商人の集団と、私的な奴婢や交通業および腐敗しやすい製品の最終の生産過程に従属する労働者の大群とがあり、主要な動脈的工業はすべて消滅してしまい、主食品と工業製品はアジアとアフリカから貨物として流れこむというようになろう』と(L. C. P. 314 前掲邦訳頁二四五ページ)。

つまり、ホブソンのヴィジョンに浮かんた寄生的帝国主義国の最後の運命は、本国における生産経済の不具化・奇形化にはかならぬ。換言すれば、西ヨーロッパの先進資本主義諸国は、めぼしい基幹産業が衰退し、生産中心ではなく、消費中心の経済に変貌をとげ、アジアやアフリカの生産経済に寄生することによって、わずかに命脈を保つにすぎなくなるといのである。ホブソンの描いた未来像は、いわば極限状況における世界情勢とでもいうべきものであった。軍事力の被支配民族への依存に危険性を感じたとはいえ、植民地や後進国の内奥から帝国主義をはねかえす新しいエネルギーが奔流のごとく噴出する情景を、彼は十分に読みきけなかったように見える。

しかし世界史の皮肉といおうか。今日の中国は、ホブソンの予想を完全に裏切ってしまった。それは自力でもって帝国主義列強の鉄鎖から自己を解放し、いまや新しい開発と建設にむかって力強い巨歩を進めつつある。アフリカにしても、ナショナリズムの高揚は沸騰点に達し、相ついで独立の気運を迎えつつある。結局のところ、ホブソ

ンの予想は誇大化された幻影にすぎなかったけれども、しかしわれわれは、警世家としてのホブソンの一面を忘れ去るべきではあるまい。

六

さてふたたびレーニンにもどろう。彼は第一〇章『帝國主義の歴史的地位』の中で書いている、『独占、寡頭支配、自由への代りに支配への傾向、ごく少数の富強国民によるますます多数の弱小国民の搾取への傾向——すべてこれらは帝國主義の諸特徴を生み出したのであって、これらの特徴により、われわれは帝國主義を寄生的あるいは退廢的資本主義として特色づけられるのだ』と。ここに彼じしんの手になる要約がある。しかし問題はそれをどれだけの重さのものとして秤量したらよいかという点にあるだろう。資本主義が成熟すればするほど、經濟成長がますます鈍化し、長期沈滞の傾向をますます強めるという意味に理解すべきであろうか。否、そうではなさそうである。彼ははっきりと斷言している。『この退廢的傾向が、資本主義の急速な発達を不可能ならしめると考えることは、誤りであろう。全然そうではなくて、個々の産業部門、個々のブルジョア層および個々の国は、帝國主義の時代においては、多かれ少かれ強くこうした傾向のどれかを示しているのである。だいたいからいうと、資本主義は以前よりも著しく急速に発達しているが、この発達是一般にますます不均等となり、しかもこの不均等は、とくに最も資本力にとんだ国々（たとえばイギリス）の退廢に現れている』と（第一〇章）。

この一句は何を意味するのであろうか。腐朽化を示す斑点は、そこに現れているけれども、大局的に達観すれば、当時の世界資本主義はなお依然として逞ましい成長をつづけている、——そういうのがどうもレーニンの真

意であるらしい。

方向を転換しよう。いったい第一次大戦前において、資本主義的体制の矛盾は、どこに最も露骨に現れていたであろうか。われわれはただちにレーニンのつぎの一句を想い浮べることができる。『独占資本が資本主義のあらゆる矛盾をどれほどまでに尖鋭にしたかは、周知のところである。ここでは、物価の高騰とカルテルの圧迫とを指摘すれば十分である。矛盾のこの尖鋭化こそ、世界金融資本の終局的な勝利のときからはじまった歴史的過渡期の、最も強力な推進力である』（第一〇章）。しかし物価騰貴といい、カルテルの圧迫という。要はプロレタリア階級の窮乏化の問題であり、中小企業の没落の問題ではないか。前の問題については、いわゆる絶対的窮乏化の理論に代つて相対的窮乏化の理論が登場したほど、当時すでに労働者の経済的地位が改善されていたことが顧みられねばならぬであろうし、後の問題については、単純な没落論から大資本への間接的従属の理論へと脱皮していたことが、想起されねばならぬであろう。

われわれはさらに想いだす、——第一次大戦の前夜、ヨーロッパ列強諸国のあいだに白熱的な軍備拡張の競争が演じられていたことを。それに伴う不生産的財政支出が、国民生活の上に死重としてのしかかることはなかったであろうか。もしあつたとしたら、帝国主義の矛盾として、レーニンが摘発しなかった理由はどこにあるのであろうか。これらの問題は、いづれも再吟味にあたいする論点だといわねばなるまい。

ともあれ第一次大戦前においては、慢性的大量失業がまだ現れていなかったことはたしかであり、それだけ問題意識は後年にくらべて深刻さの度を異にしていたかとも考えられる。あの一九三〇年代における大量失業の継続ほど、資本主義体制の矛盾と危機をば、単なる言葉ではなく、実感をもつて一般に自覚せしめたものはない。それは

資本主義の成熟と長期沈滞の問題を否応なしに日程にのぼらせると同時に、経済の理論と政策の両面にわたって、新たに大きな刺戟を与えたのであった。

しかし、われわれの視野をそのように拡大することは、当面の課題にとって越境の譏りをまねがれぬかもしれない。ここでわたしの指摘したいのは、つぎのことだけである。すなわち第一次大戦前と第一次大戦後とくに一九三〇年代とでは、事情はかなり違ひ、第二次大戦後の今日とではなおさら違ひということ、従つてレーニンの説の評価にかんしても、エビゴノンのあいだですら見解は必ずしも一致せず、むしろ動搖が見られるということだ。念のため、左に例証をあげよう。

第一はいわゆるスターリン論文である。換言すれば、レーニンが『帝國主義』の中で述べた例の一句、すなわち資本主義の腐朽化にもかかわらず、『全体として資本主義は、以前とは比較にならぬほど急速に發展する』という命題は、いまなお効力をもつと主張できるだらうか、という問題にはかならない。これにかんするスターリンの公式の解答にいう。『わたしはそのようには主張できないとおもう。第二次世界戦争にもなつて發生した新しい諸条件のために、この……命題は効力を失つてしまつたと考えることが必要である』と（飯田貫一訳『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』國民文庫版 昭和二八年 四一ページ）。レーニンの命題の今日的妥当性にかんする論争は、一九五一年一月の討論に端を発するが、スターリンの解答はソビエトにおける公権的解釈として、この論争に最後のとどめを刺そうとするもののごとくであつた。

しかし彼の死後はからずも捲きおこつた一陣の旋風は、スターリン批判の形をとつて、同じテーゼにかんする正反對の評価をくださしめた。それは一九五六年二月に催されたソ同盟共産党第二〇回大会におけるフルシチヨフ報

告によって明かである。彼はスターリンの見解をしりぞけ、ふたたびレーニンのテーゼを正しいと折紙づけた。『資本主義の全般的危機が完全な停滯、生産と技術的進歩の停止を意味するというような考は、マルクス・レーニン主義にとってつねに無縁であるといっておかねばならない。V・I・レーニンは、資本主義の全般的な腐朽化の傾向は、いろいろな時期の技術的進歩や生産の発展を妨げるものではないと指摘した。……従ってわれわれは、資本主義経済を注意深く見守らなければならず、帝国主義の腐朽化にかんするレーニンの命題を単純にうけとってはならない』（『ソ同盟共産党第二〇回大会』第一分冊 合同出版社版 昭和三十一年 一ページ）。

スターリンの脳裡には、単一世界市場の崩壊、資本主義経済圏の縮少が市場の狹隘化に一段と拍車をかけるであろうという予想が横たわっていたかもしれないし、フルシチョフの念頭には、技術革新の進行がよびおこす設備投資の資本主義諸国に与える乗数的効果が、漠然と支配していたかも知からない。しかし両者いずれも精細な論証を欠くため、その断言的命題は、いたずらに神託的語調を伝えるだけである。

七

帝国主義の寄生性と腐朽化の問題について、レーニスがなканずくホブソンに依拠するところ多いことは、すでに一言したが、そうかといって無条件的・全幅的な傾倒を示しているわけではない。ヨーロッパ連邦の可能性にかんするホブソンの所説をながながと引用したあとで、レーニンはいつている。『著者は完全に正しい。もし帝国主義列強がなんらの抵抗にもぶつからないならば、それはまさしく右のような結果に到達するであろう』（第八章）。なんのことはない。留保条件つき賛成といった恰好だが、実はもう一つ注文があったのだ。いわく、『しかし

ただ一つ、労働運動の内部でもまた、いま大多数の国で勝利をしまつてゐる日和見主義者どもは、まさにこの方向に系統的にまた根柢よく「働いてゐる」ことを、つけ加えておくべきであつたろう」と(同上)。つまりホブソンには一つの盲点がある、とレーニン主張するのである。では、それは何か。ほかでもない。『帝國主義は世界の分割と、——あえて中国だけにかぎらず——他の国の搾取とを意味し、ひとにぎりほどのもつとも富裕な国々にとつての独占的超過利潤を意味するが、その帝國主義は、プロレタリアートの上層部を買収する経済的可能性をつくりだし、これによつて日和見主義を培養し、形成し、強固にする。だが、ただ一つ、一般的には帝國主義にたいし、特殊的には日和見主義にたいして反抗しつつかある勢力のあることは、けつして忘れてはならない』(同上)ということである。そうしてこの命題こそ、レーニンの信条の核心だといつてよい。だから、彼は繰り返し繰り返し同じような文言を吐露するのである。『帝國主義は労働者のあいだにも特権をもつ分派を生ぜしめ、そしてこれをプロレタリアートの大家から分離する傾向がある』(同上)。これはいうまでもなく労働貴族の理論だ。しかもマルクス、エンゲルスの光背によつて一段と権威づけられるところに、その特色がある。

レーニンによれば、帝國主義には労働者を分裂させ、彼等のあいだに日和見主義をつよめ、労働運動の一時的衰退をうみだす傾向が内在しているが、こうした傾向は、イギリスでは一九世紀の末や二〇世紀のはじめよりずっと以前には、はつきりと現れてゐた。なぜかという点、当時のイギリスは『帝國主義の二つの大きな特質——膨大な植民地の領有と世界市場における独占的地位』をすでに具備してゐたからである、とレーニンは説く。そしてこのことを証明するために、彼はエンゲルスの多くの手紙やエンゲルスが旧著の新版に付した序文を提示する。古いところでは一八五八年ごろの、新しいところでは一八九二年ごろのもので、それはあるのだが、ともあれそうした手続き

をふんだあげく、最後に打ちだした結論は、(一)イギリスのプロレタリアートの一部のブルジョア化、(二)プロレタリアートの一部がブルジョアによって買収されているか、あるいは少くともブルジョアから報酬をうけている人間に指導されているという事実である。

しかし問題は、たんに客觀的事實の暴露だけに止まることをえない性質をもつ。それは当然に戦術に結びつくし、また結びつかざるをえない。労働貴族、腐敗した幹部の指導から労働大衆をひき離し、反帝国主義運動を激化せよ、われわれは言外に含まれた意味をこのように理解することができる。同時に第三インターナショナル、コミンテルンの結成と國際労働運動の主導権の奪還を指向する理論的跳躍板がそこにある。

右に見たとおり、レーニンはエンゲルスを引用して、自説の正当性を裏書きさせようとしている。けれどもこの試みが果して成功したかどうかは、疑わしい。むしろ両者のあいだには蹊えがたき懸隔があるのではなからうか。このことを明かにするために、わたしはエンゲルスが晩年に執筆した『イギリスにおける労働者階級の狀態』のドイツ語第二版（一八九二年）から、決定的に重要と見るべき一節を摘録しよう。『イギリスの工業上の独占がいついたあいだは、イギリスの労働者階級は、この独占の利益にある程度まであずかっていた。この利益は彼らのあいだに甚だ不平等に分配されていた。特権的な少数者がその最大の部分を懐にいられた。けれども大多数者でさえ、少くともときどきは一時的にそのわけ前にあずかった。そしてこれこそ、オーウェン主義が死滅してこのかた、イギリスに社会主義が存在しなかった理由である。独占の崩壊とともに、イギリスの労働者階級はこの特権的地位を失った。いずれの日にか彼らは、ぜんたいとして——特権的な指導者をもふくめて——自分たちが外国の労働者と同じ水準にひきおろされたことを知るだろう。そしてこれこそ、イギリスにふたたび社会主義が存在するようになる

るであらうという理由である』(*Die Lage der arbeitenden Klasse in England*, 7 Aufl. 1921 S. XXIII. フランク・エンゲルス選集、補巻2 昭和二六年 五〇四ページ)。これをさきに掲げたレーニンの主張と比較対照せしめよ。論文『第二インターナショナルの崩壊』(一九一五年)および『帝國主義と社会主義の分裂』(一九一六年)をも読みあわせながら、前後の脈絡をたどって、相違点を抽出するならば、大要つぎのごとく措定することができるようにおもう。

第一、エンゲルスが問題としているのは、もっぱらイギリス工業の國際的優位性にもとづく超過利潤であつて、植民地の領有から生ずる超過利潤は、別にとりあげていない。これに反してレーニンは、イギリスだけに限らず、帝國主義列強を念頭にいれ、また工業的独占だけでなく、植民地から流れこむ超過利潤を問題とする。しかも力点をむしろ後者においているものごとくである。

第二、エンゲルスによれば、イギリスが工業の國際的優位性を保つていたあいだは、それによつて超過利潤をあげることができ、しかも超過利潤の一部は主として労働者階級の上層部の賃上げに役立ったとはいへ、多少とも労働者大衆の全般をもうるおすことに役立った。そこにイギリスの社会運動が一般に低調となった原因がある。

反対にレーニンによれば、イギリスが世界の工場たる地位を失つてからでも、問題にvarietyはない。植民地のうむ超過利潤の一部は、労働者階級の上層にころがりこみ、彼らの懐ろを温める。しかし一般の労働者大衆は何らその恩恵に浴さない。労働貴族と労働大衆のあいだには、かくされた断層がある。

第三、エンゲルスによれば、ドイツやアメリカなどの新興工業国の急激な發展によつて、イギリスが過去の覇権を失うにつれ、イギリスの労働者階級も全般的に特権的地位を奪われるようになった。この変化はやがて労働者を左傾せしめ、社会主義的勢力がふたたび活気をとりとす契機となるであらう。当時、不熟練工の結成した『新型

組合』や社会主義系国会議員の当選は、その兆候にはかならぬ。他方、レーニンによれば、ブルジョア階級は労働貴族を手先として、労働者大衆をも自分たちの側にひきつけているけれども、労働者階級の内部にもともと断層があるのだから、労働者大衆がほんとうに目覚め、事の真相を看破するようになれば、必ずや彼らから離反し、反帝国主義運動に身をゆだねるに相違ない。汚れなき大衆を啓蒙し、墮落した幹部の指導から絶縁せしめることこそ、マルクス主義的戦術の要諦である。

八

エンゲルスとレーニンのあいだには、若干の食い違いがあるようだけれども、レーニンがエンゲルスから重要な示唆をくみとったことは明かであり、従ってわれわれはレーニンが一種の補外法を試みたものと見ることができよう。そういう意味からすれば、レーニンのエンゲルス解釈が正しかったかどうかにかかわらず、拘泥する必要はない。われわれはむしろ両者の相違をいちおう容認し、両者のうちいずれが情勢判断の上でより多くの妥当性をもつかを問題とすべきである。この点に関連して、シュレジンガーの見解を引用することは、おそらく徒勞ではあるまい。彼はいつている、『帝国主義から利益をうけるのは、「労働貴族」だけだというレーニンの考えが、主要資本主義諸国の共産党の自己主張にいかに関与するものであろうとも、それよりは利潤は不平等に分配されるが、しかしある程度までは全住民に享受されるというエンゲルスの方式の方が、独占的地位のはっきりしている国にとっては、実情にあうであろう』と(R. Schlesinger: *Marx, his time and ours*, 1950 p. 200 高島壽哉「本間要一郎共訳『マルクス主義と現代』上巻 昭和三十一年二月一ページ以下)。イギリスの労働組合や社会主義政党的保守的性格を植民地からの超過利潤のみによって理由づけよ

うとするエンゲルスの見解それ自体が、わたしにとってはすでに一箇の疑問なのだが、いま立ちいる余裕はない。疑問を留保したまま、さらに前進を続けよう。

労働者階級の状態は、あらゆる社会運動の事実上の地盤であり、出発点である。これはエンゲルスが若い時分から確信するところであつた。そしてそれゆゑにこそ、彼は一九世紀の四〇年代におけるイギリス労働者階級の状態に鋭い解剖のメスをあてたのであつた。しかるにレーニンは、二〇世紀初頭における主要資本主義諸国の労働者がいかなる状態にあるか、すなわち賃金や労働時間はどうなっているか、失業保険や災害補償はどうなっているか等々について、彼の帝國主義論の中で何らの分析も行っていない。そこに思わぬ落とし穴がかくされていはしなかったか。

シュテルンベルクによれば、第一次大戦前の時期に一段と高い生活水準を享受していたのは、単に労働者階級の微分的少数者、一種の労働貴族だけであつたというのは、完全に正しくない。真相としては、ヨーロッパの巨大工業諸国の労働者階級ゼンたいの生活水準が改善されたのである。もちろん労働者のそれぞれの部門のあいだには、生活水準に差違があつた。しかし重要なのは、こういう差違は労働者階級ゼンたいにおよぶ一般的な改善傾向の中での差違であつたという点である。この点に坎するかぎり、ヨーロッパのどの工業国においても例外はなかつた。そこで彼はいうのである。『レーニンは帝國主義に坎する彼の書物の中で、多数の統計を発表しているけれども、世界戦争にいたるまでの時期におけるヨーロッパの巨大工業諸国の工業労働者の実質賃金の変動を扱った統計の省略が目立つことを指摘しておくことは、非常に興味ぶかいことであらう。』『まさに帝國主義の時期が資本主義的帝國主義諸国の社会的対立を、レーニンが想像したように激化させないで、後退させたという事実こそ、改良主義——レーニンはこれを社会的排外的好戦主義と呼んだ——が、単にいわゆる労働貴族にだけでなく、さらに労働者

階級の圧倒的多数によっても支持されなかった理由であった。そしてその結果、レーニンとその追隨者たちにとって、戦争中にも戦争後にも、労働者の圧倒的多数をその指導者から引き離すことの絶対に不可能であったことが証明された』と (F. Sternberg, *Capitalism and Socialism on trial*, 1951, p. 201 福里次作訳『試験の上に立つ資本主義と社会主義』昭和三十三年 二五六ページ)。

シュテルンベルクの批評は、ある意味でたしかに急所を衝いている。しかし、慢性的大量失業という深刻な問題を抱えこんだ第一次大戦後とそうでない戦前とは、事情はまるで違うであろう。シュテルンベルクは戦前と戦後の情勢を同格に扱った嫌いがあり、そのまま全面的に肯定しかねる部分を含んでいる。というのは、第一次大戦後、資本主義諸国の実質賃金は騰貴したとはいえ、大量失業が固定化し、いたるところ危機的な様相を現出するにいたったからである。いまや賃金ではなく、失業こそが、最大の問題となった。が、それはそれとして、第一次大戦前の西欧資本主義諸国にかんするレーニンの情勢判断についていえば、観念的把握と歴史的現実とのあいだに大きな深淵がのぞいていたことは、否定すべくもない。しかしレーニンの分裂主義のドグマは、彼れの死後もなお依然として不思議な生命力を發揮した。彼が生み落した第三インターナショナルは、ながく彼の遺訓を守って、社会民主主義との果敢なる闘争に献身した。だが、あらゆる狂奔にもかかわらず、結果的には失敗に帰し、両者の相剋はいたずらにナチスをして漁夫の利をえせしめたにすぎない。『最高の段階としての帝国主義』が刊行されてから、一〇年、二〇年、三〇年と歲月は青もなく流れ去った。ひとは今日あらためてこの間における歴史の歩みを反省し、理論と実践の双方についてある程度の批判をくだしうるだけの精神的余裕をもつようになったといえないであろうか (一九六〇・三・二〇)。